

實相寺 花園會報

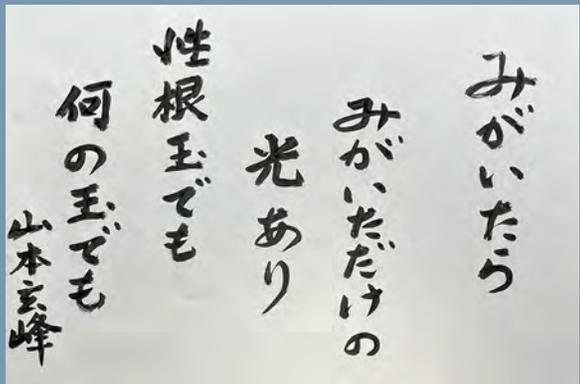
令和四年
十一月一日発行
發行所
臨濟宗妙心寺派
陽明山 實相寺
實相寺花園會
〒761-0450
高松市三谷町
1811番地1
TEL.087-889-3838
編集發行人
山本文匡
<https://www.jissouji.net>

第163号

お寺の掲示板

間もなく当山にて教区の御親化授戒会が開かれますが、小倉宗俊管長猥下をお迎えするにあたり、どの様な掛け軸をお掛けしようかとずっと思案していたところ、先日縁あって山本玄峰老師の墨蹟を入手することが出来ました。

玄峰老師は妙心寺の管長も務められました。昭和初期に小倉管長が住職されている犬山の瑞泉寺を復興し、僧堂を開単された方でもあります。そこで今月はその墨蹟に因み、玄峰老師の有名な歌を書かせて頂きました。



「玉は泥中に有って潔し」

左の写真が表紙でご紹介した山本玄峰老師の墨蹟です。晩年の作ではないようですが、蓮華が泥の中から咲くように、私達の仏心は決して汚れないことを説かれた言葉です。

慶応元年、紀州に生まれ、昭和三十六年に遷化された玄峰老師をご紹介します。年にはとても紙幅が足りませんが、そのお人柄が少しでも伝われば幸いです。



法事の塔婆サイズ変更について

現任職になってから、一周忌以降の法事では写真左側の五尺塔婆を使用してきました。これは先住職の頃は塔婆は施主家が仏具屋で購入し、当日筆や墨を用意していた手間を省くと共に、塔婆料による収入増を目指したからですが、昨今は塔婆は不要という方もあるので、今後は回忌に関わらず全て右側の三尺塔婆に統一し無料とします。



「おおらかな心」
 今月久々に布教勉強会が開かれるので申し込んだところ、表題について話をするように、との課題を頂きました。

国語辞典で「おおらか」を調べると、①(人柄が) ゆったりしていて、細かいことにとらわれないさま。

②多いさま。たくさん。「飯・酒・くだものどもなど一にして食べ」/宇治拾遺物語「②が原義」とあり、現代では寛容・寛大の意味で使っている「おおらか」は、実は元々「大らか・多らか」から生まれた言葉だったことが判ります。

確かに、資産家であれば少々の出費に目くじらを立てる必要も無いでしょう。お金持ちなら「おおらかな心」で毎日を暮らせるのかも知れません。

しかし一般庶民が「おおらかな心」で生きるには、一体どうすればよいのでしょうか？

「大いなるものにいだかれあることをけさふく風のすずしさにしる」

これは以前にもご紹介した山田無文老師の歌です。無文老師は学生時代、結核に罹りました。当時の結核は死の病です。医者にも見放され、一人孤独に療養していた時、ふと、そよぐ風から生まれてから今日まで自分を生かしてくれてきた空気という大いなる存在に気がついたのだそうです。

なるほど、無文老師ほどではないにせよ、病気になつてはじめて判る健康の有り難さ等、失つてから気がつくあたり前の有り難さ、というのは誰しも経験したことがある筈です。

とは言い、「喉元過ぎれば熱さを忘れる」とも言われるように、一時の殊

勝な心がけもいつの間にか忘れてしまふのが我々凡夫です。特に最近は何も大きな戦争が起こるのではないかと心配ですが、そうならないためには、今の私達がどれほど幸福で恵まれているかを自覚する必要があるでしょう。

ベトナム人禅僧のティク・ナット・ハン師が92年に来日した際、通訳を務めた曹洞宗の藤田一照師は、別れ際に「There is no way to happiness.

Happiness is the way. (幸せへの道はない。幸せが道である。)」と書かれた色紙を貰ったそうです。当時、藤田師は「今は苦しいけれどもいざれ幸せになれるだろう」と頑張っていたそうですが、それまでの「自分が頑張って何

かを手に入れる」という発想を変えるきっかけになったと仰っています。

また藤田師は「打楽器は置く床で音が変わる。観客の服装でも音が変わる。楽器だけで音が鳴っているのではない。同様に、人間も自分一人で生きていく訳ではない。周囲の人や環境も含めてはじめて今の自分がある。なので坐禅も坐っている人だけでなく、床も坐禅、空気も坐禅していると理解しないといけない」とも仰っています。

「幸福は自分が努力して手に入れるもの」という発想では、永遠に満足は得られません。そうではなくて、今の自分を支えてくれている沢山の存在に気がつくことが出来て、人ははじめて幸福となり、原義通り「大らか・多らかな心」で生きていけるのでしょうか。